

「ネガティブな異界」としての「ネバーランド」：現代に読む『ピーター・パン』

10L048 齋藤 彩莉沙

はじめに：現代に読む『ピーター・パン』

大学3年次の終わり頃から就職活動が始まり、4年次になると内定をもらい就職先が決まる仲間が次第に増えてきた。小学校から数えると15年以上もの学生生活を終え、社会人として働かなければならないという意識が自分の中にも周囲の仲間の中にも強く表れるようになった。社会的に保護される立場から、何事にも自己責任が付きまとう一人の大人にならなければならないことに気付くと同時に、「大人になりたくない」、「働きたくない、遊びたい」、「来年も学生でいたい」という声を多く耳にするようになった。ちょうどその頃「ピーター・パン症候群」という言葉を耳にした。そして「ピーター・パン症候群」は、いつまでも大人に成りきれない人々に当てはまる症状を指すものであると知った。そこで、原作の「ピーター・パン」はどのようなものなのかに関心を抱き、研究に至った。

ジェームズ・マシュー・バリ (James Matthew Barrie) の「ピーター・パン」は、世界中で長く愛されている。しかも、「ピーター・パン症候群」という言葉にまで発展していることに見られるように、作品には、現代にも共通する子ども像や問題点を読み取ることができる。

バリは、ピーター・パンが登場する作品をいくつか残している。例えば、1902年の『小さい白い鳥』(The Little White Bird) や、1906年の『ケンジントン公園のピーター・パン』(Peter Pan in Kensington Garden)、1911年の『ピーター・パンとウェンディ』(Peter and Wendy) が挙げられる。しかし私たちが良く知っているのは、ミュージカルやディズニーのアニメーションで良く知られている『ピーター・パンとウェンディ』である。ディズニーのピーター・パンは、いつも明るくて元気が良く、どんな冒険にも勇敢に挑戦するイメージが強い。また、自由に生きるピーター・パンに憧れを抱く人も少なくない。しかし、原作には現実的で残酷な描写が多く見受けられる。原作を細部まで読むと、ネバーランドに住むピーター・パンやロスト・ボーイズの言葉や行動には、現代にも通じるような問題点が多く表れていることに気付く。本論では、このような場面を取り上げ、「ピーター・パン」を現代に読む意味について考えていきたいと思う。

1983年に出版された『ピーター・パン・シンドローム』(The Peter Pan Syndrome) では、著者のダン・カイリーは、「大人になりたくない」男性たちを「ピーター・パン人間」と名付けた。自分たちの問題を、物語の解釈を通して読み解いていく手法をダンは、「アクティブ・リーディング」と呼んでいる。私は、ここでは、『ピーター・パン』というテキストを現代の子どもたちの状況を表す物語として読んでいきたい。

1. 『ピーター・パン』に見る「子ども」の問題

『ピーター・パン』には、主人公のピーター・パンを含めて、ダーリング家のウェンディ、ジョン、マイケルの姉弟、ピーターの手下たちのロスト・ボーイズと多くの子どもが登場する。

ダーリング家の子どもたちについては、どのようなことが言えるだろうか。まず、子どもたちの両親に対する態度である。身近な母親には好意的だが、父親の態度には疑問を持っている。父ジョージは、現実的で世間体を常に気にしている。自分の言い分を正当化し、上手くいかないことは周囲のもののせいにする。自分が家計の担い手であると威厳を振りかざす割には、家庭内では子供っぽい行動が目立つため、子

どもたちは、彼を理想的な大人して認識することはできない。一方、母メアリーは、優しくて面倒見が良く、何よりも子どもを大事に思っている。また彼女は、子どもだけでなく、夫からも、優しく全てを受け入れる「母性」を期待されている。

次にネバーランドのロスト・ボーイズたちについて考えてみよう。ロスト・ボーイズは、幼い頃に乳母が目を離れたすきに乳母車から落ち、ネバーランドに送られたと説明されるトゥートルズ、ニブズ、スライトリー、カーリー、ツイングの迷子の6人の男の子たちである。ピーター・パンの元、ネバーランドで「冒険」の毎日を送る彼らは、ダーリング家の子どもたちから見れば、うらやましい存在かもしれない。しかし、よく読んでみると彼らの生活には奇妙な点が多い。

彼らの食生活は、非常に不規則である。

みんなのたべものは、おもに、パンの木の実の蒸し焼き、山のいも、ココナツ、焼豚、マミーの実、タッパのパンとバナナ。それらをポーポーの実のひょうたんでのどに流しこむのです。でも、いつだって、ほんものの食事にするのか、『うそっこ』の食事にするのか、わからないのです。すべて、ピーターの気まぐれしだいでした。」(厨川訳p.153)

彼らにとっては、食事さえ「ごっこ遊び」の延長上にあるのだ。また、彼らが住む地下の家には、一人一人の寸法にあった空洞のある丸太が出入り口として据えられている。「いったんからだが木にあってしまえば、永遠にあわせておくように、大いに注意をはらわなくてはなりません。」(p.150)とあるように、ロスト・ボーイズたちは、成長しすぎないように気を配らなければならない。このように、生活の基礎である衣食住の概念が、ネバーランドでは乱れている。

ピーター・パンは魅力的なキャラクターだが、リーダーとしてはいくつかの問題点が見受けられる。まず1点目は、集中力と記憶力が欠如している点である。彼の性格については、「ピーターはとても移り気で、たった今夢中になっていた遊びも、すぐつまらなくなってしまうたち」(p. 86)とある。遊びを始めたと一瞬は楽しいがそれが長くは続かない。また、周囲のものに対する記憶や愛着が持続しない。

また、ピーター・パンの気まぐれを制止する者がおらず、ロスト・ボーイズたちは、彼に対して自分の意見や意思を述べられない。「ピーターの言いつけには、したがわなくてはなりません。」(p.138)や、「みんなにとっては、つらいことですが、とにかくピーターのする通りにしなくてはなりません。」(p.154)という表現が、原作には何度も登場する。食事についても同様で、彼の「ほんもの」は、みんなにとっても「ほんもの」であり、逆らうものは暴力で制止される。

ピーターとほかの子どものちがうところは、みんなが「うそっこ」だということを知っていますが、ピーターにとっては、「うそっこ」(make-believe)と「ほんもの」(true)とは、まったくおなじなのです。これが時々、みんなを閉口させるのです。たとえば、夕ごはんをたべたつもりにならなくてはならない時などは、閉口でした。もし、みんなが「うそっこ」を途中でだめにしたりすると、ピーターは、罰として、みんなの指の関節を、ぶつのです。(p.138)

ピーター・パンは、自分が思うことは皆も思っているに違いないという「オレ様」意識が強く、まるで、いじめっ子のリーダーのようである。

ロスト・ボーイズは一人一人個性的だが、彼らの発する言葉は奇妙に似通っている。

ピーターは大声で、「ぼくは、今日、インディアンになるぞ。トゥートルズ、おまえは何だ？」とさげました。すると、トゥートルズも、「インディアンだよ。おまえは？ニブズ。」と言いました。すると、ニブズも、「インディアンさ。おまえは何だ？ふたごくん」と、こんなあんばいで、男の子はみんな、インディアンになりました。(p.160)

ピーター・パンは時折、ロスト・ボーイズにも意見を尋ねるが、いつも全員が同じ答えを述べる。皆と一緒にでなければならないという威圧感、仲間外れになりたくないという意識が窺える。ダン・カイリーは、ネバーランドの仲間意識に関して、このように述べている。

同じになるためのモノを先を争ってそろえることで、まだ多少なりとも残っていた自身をきれいになくし、自由の精神を忘れてしまう。たえず「仲間外れ」にならないように神経を張りつめているうちに、仲間であるという連帯感の楽しささえも忘れていく。その結果、残るのは孤独感である。(カイリー p. 46)

ロスト・ボーイズだけでなく、ピーター・パン自身も、暴力や威圧を用いてロスト・ボーイズを従えることによって心の穴を埋めようとするが、結局何をして心も満たされず、いつも寂しさを拭えない。また、そういった悩みを誰かに話すこともできない。ダン・カイリーはピーター・パンの孤独感を両親との離別、母親からの拒否に原因があると述べている。(カイリー p. 85) 特に彼に母親の話をする、心が苦しくなることに、ピーターは自分でも気付いている。彼は、自分は母親に見捨てられたと思ひ込み、母を信じるのができないためにロスト・ボーイズにも母親の話をするのを禁じている。しかし、心の底ではピーターは母親からの愛情を強く必要としている。ウェンディー、インディアンの酋長の娘タイガー・リリー、そしてティンカー・ベル、この3人はピーターに好意を抱くが、彼はその気持ちを理解することができない。「自分の何かになりたいらしいが、母親ではない」と、どんな関係が求められているのか全く分からないのである。母親への執着が強く、愛情を受けていないと思ひ込んでいることが、心の不健康に繋がっている。

2. ネバーランドという空間

ネバーランドは、インディアンや人魚、海賊がいて、子どもたちが憧れる夢と冒険の国である。しかし、大きな問題を抱えた場所でもある。

1つは現実という感覚が欠如している点である。ネバーランドの住人には時間の感覚がない。彼らが年を取ることがないのは、時間を意識することがないからである。常に時間に追われている現実の世界ではありえないことである。また、冒険や戦い、遊ぶことに毎日を費やし、それ以外の知識を得る機会はない。身体面だけでなく内面も成長する機会がないのである。

ネバーランドに住むピーターやロスト・ボーイズにとって、一番身近な大人は海賊である。カイリーが指摘するように、フック船長は、ピーター・パンのもう一つのグロテスクな姿であると考えられる。

ピーター・パン人間は、ごく自然にいたずらを思いつき、あざやかな手つきで大切な物をつかさって行く。軽んじられたと思うと、猛烈な勢いで詰め寄ったり、約束や嘘を並べ立てて心を虜にする。海賊たちは帰るべき家を持たないが、自分たちの家と呼ぶ場所が欲しくてたまらない。終わりのない

旅を続けながら、心の平安を見つけたいと願っている。ピーター・パン人間の人生に欠けている最大のものが信頼であり、海賊的行為をするのは波乱万丈な人生からほんの一瞬でも離れたいからだ。海賊もピーター・パン人間も自分に対する責任感が欠けていて、自分たちの不幸を引き起したのは自分自身なのだと気付いていない。(カイリー pp. 51-53)

ネバーランドは、子どもたちが求められる自己の役割や責任から目をそむけ、気まぐれな冒険の毎日を通すことを許してしまう空間である。ダーリング家の子どもたちも自分たちを守り、愛してくれる家族の存在を忘れかけてしまう。そして、ピーター・パンは自分の問題に向き合うことなく、自分と周囲の命が失われることを恐れない冒険にふけっている。

3. 現代に読む『ピーター・パン』

ダン・カイリーは、1950年代の頃から1980年代にかけてのアメリカの教育の変化について次のように指摘している。「書籍やメディア、教育思想に至るまで、全てが許容の精神をモットーにしてきた結果、親の権威を振りかざしたり、罰を与えるのはもつてのほか、子どもの成長空間を制限するようなことは、決してしてはいけないという育児が主流になった」(カイリー p. 43)と述べている。同じ頃、日本でも教育に似通った変化が現れている。1968年の学習指導要領改訂では、科学的な概念と能力の育成を図ることを目指していたのに対して、1977年の学習指導要領改訂では、ゆとりのある、かつ充実した学校生活を送ることが重視され、そしてやがて「ゆとりの時間」が設けられたと共に、指導内容と授業時数が削減されるに至った。

子どもたちに寛容で、彼らの自由を重んじる社会を否定はしない。ゆとり教育はデメリットだけではなく、個に応じた丁寧な指導が可能となり、全ての子どもの理解に繋げることができるというメリットもある。また、現代の子どもたちの問題には教育方針の変化だけでなく、社会や家庭環境の変化も背景にあるだろう。いずれにせよ、現代において、子どもたちが、「大人」になることとは何か、「現実」とは何かを認識する機会は失われつつあるのではないだろうか。現実とのバランスが取れない「ピーター・パン人間」について、カイリーはこのように述べている。

彼らは10代の後半から20代の初めを、勝手気ままに生きてきた男たちだ。ナルシズムに酔い、自分以外の世界は見ようとせず、現実離れた自我の旅をつづけ、その時々空想のままに行動することを最高と信じていた。しかし、現実という壁にはばまれ、だんだん目が覚めてみると、今度は今までとは逆に、「…したい」を「…すべきだ」に置き換えて、世間から後ろ指をさされない生き方こそ、自分に許される唯一の生きる道だと、180度の方向転換をやったのける。ときどき、感情を抑えきれなくなって爆発するが、まわりの人たちはそれを男らしい自己主張と解釈しがちだ。しかし彼らは、愛されて当然とは思っても、自分から他人を愛そうとはしない。大人のフリをしているが、やっていることをよく観察すると、甘やかされた子どもと同じ幼い男にすぎない。」(カイリー pp. 6-7)

また、「ネバーランド」と類似した空間へと私たちは日常的に行き来することが可能になっている。それは、インターネットである。現在のインターネットの普及率は、総務省によると、平成24年末の調査では、9,652万人で普及率は79.5%である。若い世代では、物心がついた頃からデジタル機器に親しむ時代になっている。インターネットの便利さやコミュニケーション・ツールとしての有効性は否定しない。

しかし一方では、インターネット上のモラルの低下、ネットいじめ、ネット依存症によるコミュニケーション能力の低下、外遊びや自然体験の減少など、新しい問題も多く起こるようになった。

心理学者の山中康裕は、大ヒットした二つの映画、『ハリー・ポッターと賢者の石』（1997年出版、映画化2001-2011年）と『千と千尋の神隠し』（2001年）をモチーフに、著書『ハリーと千尋世代の子どもたち』において、21世紀の子どもたちの心の深層と、子どもたちの置かれる環境を読みといている。

『ハリー・ポッターと賢者の石』、『千と千尋の神隠し』、『ピーター・パン』には、常に異界と隣り合わせであることと、登場する子どもの年代が同じであるという2つの共通点がある。そして山中は、ゲーム・ソフトや携帯電話などを駆使し、「情報の断片や細切れのデジタル的な知識だけはやたら持っているにもかかわらず」、目の輝きや生気、やる気を失った子どもたちの姿を問題視している。（山中 p. 4）また、デジタルの世界に依存し、過保護に育てられた子どもたちについて、以下のように述べている。

守られ、囲われ、隠蔽されて、子どもたちは現実感を奪われる状況、現実感を失わせる状況に、ずっと置かれているのよ。親たちからすると、子どもを危険から守り、よかれと思って、子どものためにやっているつもりなのだけれど、それはだんだんと現実感を奪い、子どもたちがもともと持っていた生き生きとした活力をなくしていくほうにしか傾いていかなかった。（山中pp. 39-40）

山中は、子どもの発達過程について、女の子は10~12歳、男の子は11~13歳を「前思春期」ととらえ、この年代は、「肉体的な命」と「精神の命」を代償にしてしまう危険性を大いにはらんでいると指摘している。そしてネット空間の危険性について次のように述べている。

ノンリアリティーの世界へ入ったとしても、ファンタジーの世界を遊べるゆとりや遊びがあれば、出口を見つけ出せるが、気がついたら本当にネガティブな異界に取り込まれていて、現実に戻って来ることができない子どもたちは多く存在する。（山中p. 56）

ネット上の情報を読み解く「メディア・リテラシー」があり、必要に応じて、「非現実」を「ファンタジー」と捉え、物語を楽しむように、その世界で遊ぶことができれば、子どもたちは「非現実」からの出口を見つけ出せる。しかし、「現実」と「非現実」の区別がつかなくなってしまった場合、ネット空間は、「ネガティブな異界」と変わり、子どもたちは体と心を代償にした冒険に巻き込まれてしまうだろう。『ピーター・パン』に登場する「前思春期」のピーター・パンとウェンディは、「ネバーランド」という空間に対して異なる反応を示す。自分の家庭やあるべき姿を思い出し、自分の成長を受け入れるウェンディは、現実の世界に帰ることができた。しかし現実を否定し、心と命を蝕む冒険に取りつかれたピーター・パンは、ネバーランドという名の「ネガティブな異界」に取り込まれてしまったのではないだろうか。

また、山中は心を病んだ子どもたちの行動の1つとして不登校も挙げている。実際、心を病んだピーターは、「学校へ行って、まじめくさったことなんか習いたくないや。」（p. 325）と、学校へ行くことを強く拒否している。不登校の問題は、2008年度からは少しずつ減少傾向にはあるが、依然として深刻な問題である。

不登校は学校をただ拒否しているだけではなく、多くの不登校の子どもたちは、今の世界の怒涛の中、勝手な流れの中にその一滴として流されるのは嫌だと降りた子たちで、その子どもたちは、流れの方向や、自分に向いた流れなど色々なことを考え、自分なりの生き方を見つけるまでは、じっとし

ていることが多い。(山中p. 151)

ネット空間にしる、不登校にしる、子どもたちが「現実」から目をそむける理由の一つとして、山中は大人たちへの不信任、なりたい「大人」の不在を挙げている。

現実が見えちゃっているわけ。毎日仕事に出かけているお父さんが、生き生きと生きていないというのを見てしまっている。お母さんがそれに対してぶつくさぶつくさ言っているのを聞いてもいる。それはテレビを通しても見えるわけだ。僕らが小さいころは、大人の世界というのは、じっくり新聞や本を読まなきゃわからなかった。今じゃ、テレビ画面を見てればわかるわけよ。政治家や経済界の人たちが、一部だけど、嘘ばかり言っているということも、わかってしまう。(山中p. 35)

山中は、人間にとって重要なこととして、「根源的な信頼関係を築くこと」、そして「根源的な自分自身を持つこと」を挙げている。これは、現代の親たちが教えないし、また教えていたとしても自信を持って教えていないために子どもに伝わっていないと述べている。(山中pp. 79-80)

まとめ

ダン・カイルーの「ピーター・パン・シンドローム」、そして山中が2つのファンタジー作品の解釈で示した例にならい、『ピーター・パン』を精読した。そして改めて、現代の子どもたちの問題について考えることができた。現代の子どもたちは、大人たちと同様にストレス多き社会の中で生きている。文部科学省は、現代の子ども・若者の今日的な課題の一部として、他者への思いやりの心や、迷惑をかけないという気持ちの欠如、生命尊重の意志の低下、「早寝早起き朝ごはん」という姿勢が重視されるほどの基本的な生活習慣の乱れ、人間関係形成能力の低下を挙げている。また、教育現場においては、いじめや不登校の問題にも多くの課題が残り、いじめにおいては、自殺の報道が跡を絶たず、特に慎重に取り組むべき課題とされている。

以上の点が、ピーター・パンやロスト・ボーイズの問題点に直結するあらゆる行動と重なっている。一見すると、自由で魅力的なキャラクターに見えるピーター・パンは、一方では、人間関係を喪失し、人間関係を築くことを拒否する、未熟さを体現している。また、ピーター・パンが君臨する「ネバーランド」は、一生自由に遊び暮らすことができる「ポジティブなおとぎの国」というだけではなく、純粋な子どもたちの心と身体の成長を妨げる「ネガティブな異界」にもなりうる。

原作を最後まで読むと、ダーリング兄弟だけでなく、ピーターの言動に違和感を覚えていたロスト・ボーイズも現実の世界へ戻り、ダーリング家の養子となり、成長して大人になる。ロスト・ボーイズが成長することができたのは、いつまでもネバーランドにいるよりもウェンディーたちと共に帰るほうが、自分たちにとって都合が良いと気付いたからではないだろうか。現実においても、現在の自分を見直し、新しいことに目を向け、変化を受け入れることこそが、課題の解決に繋がると考えられる。

以上の事から、バリが20世紀初頭に書いた「ピーター・パン」は、21世紀の子どもを読み解くテキストとしても有効であると言える。

引用文献

Barrie, James Matthew. Peter Pan (1911) . London: Puffin Books, 1986.
バリ, J.M. 厨川圭子訳『ピーター・パン』 東京：岩波, 1954.)
カイリー, ダン. 小此木啓吾訳『ピーター・パン・シンдрローム』 東京：祥伝, 1984.
文部科学省 『生徒指導提要』 東京：教育図書, 2010.
山中康裕 『ハリーと千尋世代の子どもたち』 東京：朝日出版社, 2002.
ディズニーのアニメーション映画、『ピーター・パン』 (*Peter Pan*) 1953年公開

引用ウェブサイト

インターネットの利用状況について

<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h25/html/nc243120.html> 8 / 1 / 14閲覧

インターネット歴史年表 <https://www.nic.ad.jp/timeline/> 8 / 1 / 14閲覧

Negative Aspects of Neverland : An Analysis of *Peter Pan*

10L048 Arisa Saito

Abstract

This paper analyzes why “Peter Pan” , one of the literary works in British Literature, is so attractive to readers, even to the point where the name of a psychological phenomenon, the “Peter Pan Syndrome” , has been created to describe someone who is unwilling to grow up. In the first section, problems seen in the characters are examined. The most prominent problem for Darling brothers, Lost Boys and Peter Pan is a declined sense of reality. In the second section, problems of children in the present age are pointed out, and compared with those described in this work. In the third section, how and why children nowadays lack a sense of reality is discussed. It can be concluded that “Peter Pan” is loved by generations of readers because the message addressed in the work continues to be a problem among young generations today.

(卒業論文指導教員 杉村使乃)